アイスプラネット (5)

椎名 誠

(十月の初め、ぐうちゃんは「いそうろう」を卒業し、外国へと旅立ちました。)

ぐうちゃんから外国のちょっとしゃれた封筒で僕に手紙が届いたのは、それから四か月ぐらいたってからだった。珍しい切手がいっぱい貼ってあった。

「あのときの話の続きだ。以前若い頃に、北極まで行ってイヌイットと暮らしていたことがあるんだ。そのとき、アイスプラネットを見に行こう、と友達になったイヌイットに言われてカヌーで北極海に出た。アイスプラネット。わかるだろう。氷の惑星だ。それが北極海に本当に浮かんでいたんだ。きれいだったよ。厳しい自然に生きている人だけが目にできる、もう一つの宇宙なんだな、と思ったよ。地上十階建てのビルぐらいの高さなんだ。そして、海の中の氷は、もっともっとでっかい。悠君にもいつか見てほしい。若いうちに勉強をたくさんして、いっぱい本を読んで、いっぱいの『不思議アタマ』になって世界に出かけていくとおもしろいぞ。世界は、楽しいこと、悲しいこと、美しいことで満ち満ちている。誰もが一生懸命生きている。それこそありえないほどだ。それを自分の目で確かめてほしいんだ。」

手紙には、ぐうちゃんの力強い文字がぎっしり詰まっていた。

そして、封筒からは写真が二枚出てきた。一枚は人間の倍ぐらいあるでっかいナマズの写真。もう一枚は、北極の海に浮かぶ、見た者を幸せにするという氷の惑星の写真だった。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ぐうちゃんは、自分の目で見た「アイスプラネット」をどのようなものだと感じたのか。本文中から二十五字以上三十字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

[　　　]～[　　　]

(2) ――線部「それ」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア アイスプラネットは決してほら話などではなく、ありえないほど大きなものなのだということ。

イ 若いうちに本をたくさん読めば、本を通じて世界についての知識も得ることができるということ。

ウ 世界は楽しいこと、悲しいこと、美しいことで満ちていて、みんなその中で懸命に生きていること。

〔　　〕

(3) ぐうちゃんからの手紙と写真を見た「僕」の気持ちとして、適当なものを選びなさい。

ア アイスプラネットの話が本当であったと知り、ほら話だと思っていたことを反省している。

イ アイスプラネットが本当にあることを知り、見た者を幸せにするという言い伝えに興味を引かれている。

ウ ぐうちゃんの考え方や生き方を知り、ぐうちゃんが自分に伝えようとした強い思いを感じている。

エ ぐうちゃんとの思い出を振(ふ)り返り、ぐうちゃんがいなくなった寂(さび)しさを改めて感じている。

〔　　〕